近代日本における〈子ども〉の誕生（1）

――「子どもと自由」に関する一考察――

川　口　祐　二

はじめに

評論家柄谷行人は、「児童の発見」という論文の中で、フーコー（M.Foucault）の説を次のようにまとめている。「フーコーは、17世紀後半から狂人が『狂人』として隔離されるようになって以後、心理学（精神病理学）が存在するようになったのだから、心理学が『狂気』を解明する鍵をもっているのではなく、そのような在り方としての狂人こそ心理学の秘密をにぎっている」。[1]さて、この文章の中の「心理学」という名辞を教育学という名辞に置き換えても、この文章の真偽の値は変わらない、つまり真である。柄谷も「心理学」を「児童心理学や児童文学」という名辞に置き換えて、自己の論の展開に役立てている。彼にならって、試しに、置き換えてみよう。

≪近代を境に子どもが「子ども」として（学校に）「隔離」されるようになって以後、教育学が存在するようになったのだから、教育学が「子ども」を解明する鍵をもっているのではなく、そのような（隔離された）在り方としての子どもこそ教育学の秘密をにぎっている≫

要素変換によって得られたこの同一構造文は、その意味内容として、「教育学」が特殊近代的な現象であること、「教育学」に対する「隔離された子ども」の先行性ということを主張している。ところで、この主張は、おそらく、我が国におけるこれまでの教育学に対して致命的とも言える打撃を与えるものである。もっと穏便な言い方をすれば、それは我が国の教育学をより広い眺望に臨む思想的地平へと否応なく連れ出し、新たな一歩を踏み出すことを教育学に余儀なくさせるものである。なぜなら、説明はすぐこの後に続けるが、今日主流を形成しているいかなる教育学も子どもへの特段の関心・〈子どもへの愛情〉を自明の前提に据えているからである。たとえば、こう言う。かけがえのないほど大切な子ども、それは成長発達する固有の権利をもつ未来の存在であり、保護され教育を受ける正当な権利主体であると。しかし、名辞変換によって得られた先の同一構造文の主張からすれば、この子どもへの特段の関心・〈子どもへの愛情〉という自明の前提そのものがまさに疑われ、あらためて考察されるべき対象となるのである。

試みに一例を挙げて、この事柄の顛末を確めてみよう。次の見解は、或る教育学事典において教育の本質に関する定義として述べられているものである。この見解は世上よく流布されているものであり、また格段の社会的評価を受けている事典の中の叙述でもある。したがって、それを一般的な通説とみなすことは、けっして不都合なことではないであろう。そこで述べられていることは、こうである。

教育とは、「人間（子ども）」に対する「目的意識的な変革（教え育てる）の働きかけであり」、「人間のもっとも基本的で本質的な活動の１つである。」そして、この教え育てる働きかけの根底には、「たとえばルソーの『子どもの権利』『子どもの発見』に象徴されるような近代教育思想」の最大の成果が据えられなければならない。つまり、「子どもをたんなる

受容器ではなく主体的な自発性と能動性をもって社会に生きる存在としてとらえ直す積極的な『子ども観』」が根本的支柱となっていなければならないのである。(2)

この定義からすぐ察知されるように、この教育学は、子どもへの働きかけを教育という営みの大前提に置いている。子どもへ働きかけたいという意識、子どもが気になって仕方のないという意識、こうした子どもへの特段の関心へと導く〈過敏な感受性〉については、それ以上たち入って懐疑の対象とされることのない自明の公準としてそれは位置づけている。教育は「人間のもっとも基本的で本質的な活動」なのであり、人間が教え育てるという目的で子どもに働きかけるのは当たり前のことである、まるでそう主張したいかのように、この定義は、子どもへの〈過敏な関心〉を再検証することをあらかじめ自制するような論理的枠組みによって支配されている。つまり、それによって決定的な制約を受けている。

しかし、この子どもへの〈過敏な関心〉が、そうした自明の前提ではなく、外的・内的要因の相互作用が生み出す〈何か〉によってもたらされたものであったとしたら、どうなるだろう。もし、何かの所産であるというこの主張が正しいとすれば、子どもへの〈過敏な関心〉を公準とするこのような教育の公理系は、自らの孕む有限性をつきつけられることになる。つまり、それはすべての現象に対する普遍性をもつものではない、ということになる。いわば、その公理系にとって自らの論理体系を破綻させる外部が登場してくることになり、その外部を説明するためには、公準の位置がもっと上流地点にある新しい公理系を創造しなければならなくなる。そして、まさにこの作業をやりとげた創造主の一人として、我々はフィリップ・アリエス（Ph.Aries）に着目しなければならないのである。いわゆる社会史の大家であるアリエスは、豊富な実証を駆使して、今日の我々が自明とみなす子どもへの〈過敏な関心〉が、近代以前に遡ると、忽然と姿を消してしまうことを示した。

ちなみに、近代を転換点として、人々の自明の意識が特殊近代的な現象として根こそぎ転倒されるというこの洞察は、方法論や対象や、その他の様々な相違点を有するとは言え、最初に引用したフーコーのそれと驚くほど似通った質を共有している。おそらく、時代の要請という大きな力が両者に通底するこの斬新な理路を掘削させている。そしてそれが、ポストモダンと呼ばれる思潮を中心として展開される現代思想の今日的状況と深く関わっているということも、察するに容易なことである。それだけではない、ポストモダン思想の中心課題であるマルクス主義思想の克服という根本的モチーフとも、それは密接不離の関係にあるはずである。しかし、このことの分析にこれ以上深く立ち入ることは、今は避ける。稿をあらためて明らかにされるべき大きな主題だからである。ここでは、とにかく、子どもへの〈過敏な関心〉・「隔離された子ども」という現象が、特殊近代的なそれであるというアリエスの論拠を明らかにすることが主要な課題である。

名著『〈子供〉の誕生』(3)から、彼の論証のエッセンスをまとめてみよう。彼によれば、子どもが主体的な自発性と能動性をもった存在として社会で生きていけるように、大人が子どもに働きかけたいと意識する「教育」が発生してくるためには、少なくとも次の二つの配慮が大人の意識に前提条件として芽生えていなければならない。すなわち、一つが、「大人たちの穢れた世界から隔離」されるという措置を講じられることによって、子どもは保護されなければならないと考える配慮であり、もう一つが、子どもは「大人たちの誘惑にたいし十分に抵抗」できるように仕込まれなければならないと考える配慮である。(4)さらに、この二つの配慮にも、もっと意識の上流に遡ってつきとめられなければならない前提が存在している。それを見てとるのはたやすいことであろう。それは、大人社会の入口には子どもにとって越えがたい段差が待ち伏せしているという意識であり、かつそうした百鬼夜行の塵界に手ぶらのままで出立させるなどということはとても忍びないことだと感じる意識である。すなわち、それは、これまでの叙述の中で幾度もくり返されてきた〈子どもへの過敏な関心〉、子どもをかけがえのないものだとみなす意識、あるいは、こうした表現が誤解を呼ばないものとすれば、〈子どもへの愛情〉といった意識にほかならない。とすれば、けっきょくこうなる。「教育」が発生してくる場合には、〈子どもへの関心〉、

〈子どもへの愛情〉、あるいはより鋭敏になった感受性というものがその前提条件として存在している。つまりその鋭敏な感受性が、まるでプリズム・ガラスのような役割を果たして、いったんいっさいの活動エネルギーを自らに収斂し、次いで消極に位置する保護の帯から積極に位置する訓練の帯までに至る、いわば「福祉」から「教育」のスペクトルまでに至る〈風景〉を外界に放散していく、こういうことである。

ところが、さらにアリエスは、これらいっさいを産出するその扇子の要のように肝心な〈子どもへの過敏な関心〉・〈子どもへの愛情〉が近代に特有のものであり、近代以前には全く存在しない、こう主張するのである。我々の眼前に確固たる実在としてさまざまな〈風景〉をパノラマのようにくり広げる力源であり、それゆえ確固たる実在としか思えないその〈子どもへの関心〉が。彼によれば、歴史の事実がそれを立証していることになる。渉猟しうるありとあらゆる事実、芸術作品（彫像、彫刻、細密画、宗教画、肖像画‥‥）、子どもの服装、遊び、性意識・風俗、教育制度、日常生活・風俗習慣、住居・建築物、日記・著書等の文献などなど、それらのいずれをどう丹念に検証しても、近代以前に遡ると、〈子どもへの過敏な関心〉はぷっつりとその消息を絶ってしまう。近代以前の社会では、そもそも子ども期というものが存在していないのであり、7才ぐらいにもなると、子どもは大人の社会に入っていって大人と区別されずに暮らしているのである。同じことだが、大人も子ども期には無関心であるため、少し大きくなると子どもを平然と大人と一緒に生活させているのである。誇張された比喩になるが、まるで透明な溶液におけるように、子どもは大人社会に溶け込んで一体となっており、大人は子どもを特別なものとして意識する〈過敏な感受性〉を所有していない。それだけではない。近代以前には、〈子どもへの愛情〉を自明の前提におく近代以降の我々の尺度からすれば、とても容認しがたい行為が行われている。すなわち、「嬰児殺し」である。これは、子どもをかけがえのない大切なものとみなし、それを保護し訓練することが人道的に正しいとする我々の価値意識からすれば、けっして許容することのできない行為であろう。しかし、アリエスによれば、近代以前には、その残酷としか思えない行為がかなり一般的に行われていたことが実証されるのである。それは、秘密裡においてであろうが、事故の形をとって偽装されてであろうが、とにかく行われていたのである。(5)

こうしてアリエスによって、子どもをかけがえのないものとみなす鋭敏な感受性は、近代を境に、忽然と登場してくるということが実証される。しかし、忽然と登場するといっても、アリエスの実証をたどれば明らかなように、近代のその新しい意識はあらかじめそのままの姿で隠れていたものが顕在化してくるというのではない。その意識は何らかの原因によって新しく作り出されてくるのであって、ゆめゆめ、時空を超えて存在する人間の本質的な属性が何らかの契機でそっくりそのままベールを脱いで現象してくるなどという錯誤に陥ってはならない。その新しい感受性は、近代を境に、帰結として〈何か〉によってもたらされてくるのであり、歴史的所産として或る〈関係〉の網の目によって織りなされて生まれてくるのである。要するに、それは関係概念のレベルにおいて解読されるべきものであって、実体概念としてとらえられるようなものではない。逆に言えば、帰結として、所産として位置づけられるものである以上、その新しい子ども意識はそれが発生してくる原因や過程を問いうるし、また問われなければならないものとして存在している。たとえてみれば、この近代の新しい意識は、溶液の中に析出される結晶のようなものである。なぜなら溶液に一体となって溶け込んでいた溶質が結晶となって外化してきた以上は、何らかの原因によってその変化が発生してきたはずであり、それゆえまたその原因もつきとめられるはずである、こうした推論の道筋と同じようにそれは考えられるからである。そのため、世上よく流布されている、人間だから子どもを愛するのは当たり前であるというような、いわば公準的解釈はここで退けられなければならないということになる。そして、近代の新しい感受性はその起源が問われるべき対象に変わり、その発生過程が究明されるべき対象に変わる。

では、その起源、その発生過程とは何か。すなわち、以上に述べてきた、いわば古い子ども観・家族意識から新しいそれへの移行は、何によってもたらされたのか。この問題に対する私なりの分析は、本章における論述に譲らなければならない。

それについて言及するためには、まだまだたくさんの手続きを踏んでいくことが必要だからである。ここでは、近代において新しい子ども観・家族意識をもたらしたその原因を、まさにアリエスの説を検討しながら、究明している教育学者森田伸子の見解[6]に触れることにする。但し、若干の言及にとどめる。森田の見解に対する本格的な検討作業については、本稿の目的にそれほど直接に寄与するものとは思えないので、他日その機会に恵まれた時に譲るのが得策と考えるからである。

さて、森田は、そもそもルソー研究者であるため、自らのルソー研究を通して蓄積した方法と認識によってアリエスを解読し、そしてそれによって近代子ども観・家族意識の発生原因を究明する。しかし、どうひいき目に見積っても、現代の混沌とした状況を裁断するに刃こぼれの予想されるルソーの解剖メスによっては、アリエスの説をはじめ、現代の状況において尖端に位置する問題を究明することは、所詮、無理な試みと言わざるをえない。そのため、森田の論全体は、驚くほど遠くまで眺望の利いた文言の散見と拍子抜けしてしまうような古典的な認識の主調音との混淆する奇妙なアマルガムと化している。そして、その弱点は、たとえば森田自身のマルクス主義批判の視点のあいまいさに集中的に現われることになるのである。

それはともかく、森田は、近代子ども観・家族意識の発生原因に対するアリエスの解答を、どうとらえているのであろうか。森田は言う、「古い家族意識から近代的な家族意識への変化は何によってもたらされたのであろうか」と。そして、そこで森田は、その自問に対し、アリエスの「〈子ども〉の誕生」にはその解答が無い、と主張するのである。たとえば、「本書にはこの疑問に答えるための歴史的因果関係の分析は全くといっていいほど含まれていない」、というように。[7]とにかく、「近代的な家族感情」は、「かっての、公私の区別を知らないままに人びとを有機的に結びつけていた開放的な社交性」から、「もっぱら私的世界にのみ関わるものとしての愛情」を分離したのである。[8]しかし、その分離した原因は、アリエスにおいては、明確に特定されることはできない、こう森田は主張する。いや森田は、アリエスが明確に特定しなかったのにはもっと積極的な理由があり、それは彼が「一つの基本的事実（たとえば経済構造の変化）から他の事実を説明する」ことを避けたかったからである、と主張したいのかもしれない。むしろ、特定しないことこそがアリエスの方法の長所であると。もともと、森田によれば、アリエスの方法にはマルクス主義史観への批判があり、「さまざまな領域における変化の相互のからみあいそのものを浮き彫りにし、それが全体として私たちにとって、どのような意味を持っているのかを問う」という、マルクス主義批判原理があるのだから。[9]

しかし、私見では、近代における新しい子ども観・家族意識の発生原因に対するアリエスの解答は、全く明快である。たとえ、彼が好んで非常に婉曲な実証的方法を採用しているため、それが言外から読まねばならない部分をもつにしても。以下、本稿の主題は近代日本における子どもの誕生に関してではあるが、それを分析していく過程において、アリエスの所見を解読することは不可避的な作業としての位置を占める。本章においてその作業をなすべき段落に至った際に、それに対する私なりの解答を提出してみたい。

第一章　近代における子ども像の分類

近代文学の研究者前田愛は、「文学のなかの子どもたち」と題する講演[10]の中で、日本の近代文学に登場する子どもについて卓抜な見解を披瀝している。そこにおける彼の認識は、通常の文学評論の位相からはるかに隔たっていて、文化・社会全般に普遍的な問題解明につながる広い地平に到達している。前田によれば、日本の近代文学のなかで描かれる子どもは次の三つの類型に分けられる。すなわち、第一の型は「子どもをおとなになる過程」や「なにかになる存在」としてとらえるもの、第二の型は子どもを純心で「無垢な存在」としてとらえ、「おとながもう一度帰って行きたい世界」、いわば「おとなのユートピア像」としてとらえる描き方、そして第三の型は子どもの固有性を認め、子どもを「おとなの論理ではつかみきれない」独自の存在としてとらえるものである。[11]

前田は、この三つの近代の子ども像を歴史的に発生してきた順次性としてとらえると同時に、いったん発生したものは人間の意識の中に累積し、

互いに共存すると考えている。前田のこの考え方をもっとくだいて比喩的に説明してみよう。すると、こうなる。あたかも河口で扇状のデルタ地帯が形成されるときのように、より早く誕生した人間の意識は外界に押し出されるとその堆積層を長く伸ばし、次に生み出されてくる意識の層の土台となってそれを支える。人間の意識は過去と絶縁して新しく生まれ変わっていくのではなく、次々と累積されていく地層のように過去を保存しながら新しい自分を生きる。人間の意識に対するこうした基本的解釈を前提に据えながら、そこから出発して、前田は近代の子ども像を時間性と空間性の両基軸の錯合としてとらえているのである。すなわち彼は、上の三つの類型が、一方で第一の型から順に第二、第三の型へと順番に発生してきたものとみなし、他方でその三つの類型は今日、いくらか変形している部分はあるにしても、消滅することなく共存しているととらえるのである。

一番最初に発生したとされる第一の型は、「立身出世主義的な子ども像」である。その典型例は硯友社に属していた巌谷小波の始めた明治時代の少年文学であり、そこに中心となって流れる基調は「国のためになるようなりりしい少年像を強調すること」であった、と前田は述べる。前田によれば、この「立身出世主義な子ども像」はそのあと時代を下っても引き継がれていくのであって、たとえば第二次大戦中の「少国民」という言葉や「少年倶楽部」という雑誌などによって示される現実はそれにあたる。そこでも「お国のために偉い人になる」という考え方が子どもの未来を限定しているのである。さらに時代を下って現代の日本社会に至ると、さすがに「末は博士か大臣かというような立身出世主義的な像」は衰勢に陥る。しかし、依然として、その内実は学歴社会や受験戦争といった現象に形を変えて存続することになるのである。(12)

近代文学によって次に生み出された第二の子ども像は、上に述べた第一の型の「明治の立身出世主義」が否定されて、「もっとささやかな幸福」が目標になってくる時に現象してくるものである。あたかも破れた大人の夢の代償であるかのように、「無垢なケガレのない子ども」が「おとなたちの見失ってしまった、いわば心のふるさと」として、あるいは「ユートピア像」として現われてくる。前田はこのように第二の型の内容規定を説明したあと、その具体例として「『赤い鳥』の文学運動とか、児童作家の新美南吉」を挙げている。最後の第三の類型は「子どもは子どもであり、おとなとはちがうんだというとらえ方」であり、その例として、前田は現代の児童文化研究者本田和子の『異文化としての子ども』という著書を挙げている。そして、この第二、第三の子ども像という意識の地層は現在まで途切れることなく伸びてきていて、たとえば前者は「モラトリアム現象」と呼ばれる青年の未成熟現象に、そして後者は子どもの非行とかいじめとか自殺といった、えたいのしれないいわゆる「教育荒廃」の現象に引き継がれている、と前田は述べている。(13)

以上のように、近代文学の子ども像を三つの類型にまとめる、いわば一般理論を提示したあと、前田はその一般理論にいくつかの具体的な作品をモデル・ケースとしてあてはめ、さらに分析を進めていく。具体的な範例をあてはめるこの一般理論の検証作業は、二段階に分けて行われている。第一の段階は芥川龍之介の「杜子春」と谷崎潤一郎の「小さな王国」との比較検討であり、第二段階は大江健三郎の「芽むしり仔撃ち」と三島由紀夫の「午後の曳航」の比較検討である。この比較検討は、講演ということもあり、十分に論を尽くして展開されているとは言いがたいものである。また、どことなく結末を懸念させるような不安な叙述も散見されないわけではない。しかし、その洞察の質的な深さについては毫も疑われるべきではないという水準にある。それは、おそらく、日本における従来の子ども観・教育観を根底から変革させるに足る十分な膂力を発揮している。

初めに、前者の芥川と谷崎とに関する前田の分析を検討することにする。その内容の骨子は、適宜説明を補充しながら述べると、以下のようなものである。

『杜子春』という物語の舞台は中国である。もともと中国の小説に『杜子春伝』というのがあり、芥川はそれをもとにこれを書いている。この小説の筋はこうである。杜子春という青年が、ある夕暮れ時に洛陽の西の門の下に立っている。非常に貧しくてなにもする気がおきない。そこへ仙人が現われて、杜子春

を大金持ちにしてくれる。だが杜子春はその財産をすっかり使い果たしてしまう。薄情にも、お金がなくなると人も寄りつかなくなる。するとまた、仙人が現われて大金持ちにしてくれる。最初と同じことが繰り返される。そしてまた、仙人が現われる。今度は杜子春は、お金の力は虚しく、薄情な人間に愛想がつきたから、仙人にしてくれと頼む。杜子春は仙人の弟子になることを許されるが、その代わり、どんな場合にも一言も口を利かないという試練に耐えられるかどうかを試される。杜子春はさまざまな恐怖にも、ありとあらゆる拷問にも耐え抜き、けっして声を出さない。しかし、最後に、地獄でムチ打たれている母親が、自分の苦痛をも顧みず、杜子春の幸福だけを願って「私たちはどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね」と献身的な愛情を示したとき、とうとう杜子春は仙人との約束を破って「お母さん」と呼びかけてしまう。こうして杜子春は仙人の弟子になるのを諦め、「人間らしい、正直な暮らし」に落ち着く決心を固める。そんな彼に、仙人も好意的な理解を示し、泰山の麓にある「桃の花が一面に咲いた」畑つきの一軒の家をくれる。以上が芥川の『杜子春』のあらすじである。ところで、ここで桃の花が一面に咲いている小さな家とは、実は、芥川が考えぬいた大正時代の小市民にとっての人生の幸福のモデルである。そして、杜子春がさまざまな試練に耐えて仙人になるというのは、まさに明治の立身出世主義を象徴しており、大正時代になると、もう末は大臣か大将かという誇大な立身出世主義が影をひそめてきているのがわかる。つまり芥川は、この『杜子春』という物語によって、明治の立身出世主義は人間の幸福を生み出すものではないから否定されるべきであり、人間は「もっとささやかな幸福」を目ざすべきであるということを主張しているのである。(14)

谷崎潤一郎の『小さな王国』は、彼が書いた少年もののなかでも最も秀れたものである。この作品の語り手は小学校の先生であり、その受けもちは5年のクラスである。この先生のクラスに、ある時、沼倉という少年が転校してくる。沼倉はそのクラスのそれまでのガキ大将をやっつけて、自分がガキ大将になってしまう。それに気づいた先生は大人の悪知恵を働かせ、沼倉をうまくおだてて自分のクラス運営に利用することを思いつく。ところが、沼倉は表面的には先生に協力するふりをしながら、先生のそういう態度を逆に利用して、目の届かない所で自分の権勢をまんまと不動のものにしてしまうのである。たとえば、秘密探偵係まで作ってクラス仲間の操行を調査・評価したり、さらには自分が「大統領」になってその独裁権力をふるうために出席簿係、補佐役、裁判官係などのさまざまな「役職」を作ったりして、クラス仲間を支配する管理組織を整備してしまう。とうとう、その「役職」には、その地位の上下に応じて、月給まで支払うという規則まで作りあげ、クラス仲間の所有物はすべてそのお札で買えるようにしてしまうのである。

そしてこんな状況のなかで、この先生の家庭は大変な困窮に陥っていく。悲惨なことに、先生の奥さんは肺病にかかり、祖母の喘息はひどくなり、子だくさんのため生活も苦しくなって、先生は赤ん坊のミルク代にも事欠くようになる。追いつめられた先生はクラスの生徒にもおこりっぽくなり、そのためかえって生徒の気持ちは先生から離反して、ますます沼倉の権勢を強めるという悪循環に巻き込まれていく。とうとう先生は正常な精神状態を失って、自分も沼倉の手下になると言い出し、彼が発行しているニセ札までもらってしまう。そして、クラスの生徒のなかには親がミルクを売っている店を経営している者もいるのだから、沼倉の力でその生徒に自分の赤ん坊のためのミルクを持って来させてくれ、と沼倉に哀願する。それについての沼倉の承諾を受けたあと、家へ帰る途中で、先生はその沼倉の子分のお店に不意に立ち寄り、ミルク代の代金としてそのニセ札を出してしまうという異常な行動をとる。そしてそこで、この物語は終わる。

この『小さな王国』に描かれている子ども

像は、「無垢でケガレのない子ども」というのとは、はっきり違っている。沼倉という子どもは、一見、勇気と寛大さと義侠心に富み、先生の代行までしてクラスをうまくまとめていく良い子のようにも見えるが、深い所で大人の裏をかいて自分の権勢を伸ばしていくという複雑な両面的存在として描かれている。つまり大人は子どもをケガレのない無垢な存在だと思いたいかもしれないが、子どもというものは大人の意表をつくような残酷なところ、邪悪なところをもっているのだ、と谷崎はこの作品で言いたいのである。したがって、この『小さな王国』は、芥川の『杜子春』とちょうど対になる作品であって、先に述べた子ども像の三つの分類で言えば、子どもという存在は大人が美化するようなものではないという第三番目の類型に含められる。さらにもう一点言えることは、この第三の子ども像が、日本では、谷崎のこの作品によって象徴されるように大正時代にその源流を発するということである。(15)

第二章　教育における新しいパースペクティブの胎動

第一章で述べた前田愛の子ども像の三類型及び芥川と谷崎の作品分析に対する論述は、次の第三章で展開される予定である。その論述のためには、まだいくつもの難しい迂路を経由していかなければならないからである。いわば、第三章の論述に至るための不可欠の理論的前提の整備、それも見通しの悪い暮色の中を進むような手探りの試行、それが第二章の主たる課題であり、そして内容である。

さて、人間の子どもは極端な受容性をその特徴とする。たとえば生誕においても、既に言い古された事実であるが、他の高等哺乳動物の子どもと比べて人間の子どもは著しく未熟な状態で生まれてくる。さらにこれも言い古された引証であるが、A．ポルトマン(A.Portmann)の比較動物学的研究によれば、あと一年は母親の胎内にいてもよいほどの無力で無能な段階で人間の子どもは生まれてくる。そのため、人間の子どもは、誕生してからも、胎児期と似たような生理的ないし情緒的共生の関係を母親などとの間で長期間にわたって継続することになる。たとえば、栄養摂取、姿勢の変化、満足を示す微笑や不満を示す泣き声などの、扶養者との間に成立する物質的・精神的な強固の結びつきは、文字通り、子どもの生死を左右する命脈となる。(16)このような人間の子どもの極端な受容的本質という、いわば生物学的な事実自体について、さしあたりは、とがめ立てをする必要はない。問いただすべき問題は、この生物学的事実から、教育に関する従来の一般的通念が自らの存在を正当化する論拠を引き出してくるその手口にこそある。

「教育原理」の多くの教科書には、最近はさすがに控え目の傾向にあるのかもしれないが、好んで「アヴェロンの野生児」や「インドのカマラとアマラ」の例が挙げられる。そして、たとえば、次のように、人間にとって教育がいかに不可欠であるかが論じられる。すなわち、このような野生児の不幸な事例は、社会からの長期にわたる働きかけなしには、人間は人間になることができないということを立証している。確かに、人間はすぐれた学習能力を先天的にもってはいるが、独りで人間になるのではない。社会生活を通じて、とりわけ幼少期には家族や隣人の力を借りて、継続的にその社会や文化を学習しなければ人間は人間にもなることができないのである、と。そして、カント（I.Kant）の著名な箴言、『人間は教育によってはじめて人間となる。』が引用されたり、ナトルプ（P.Natorp）のそれ、『人間は、ただ人間的な社会を通してのみ、人間となる。』が引用されたりする。

「教育原理」テキストのこうした叙述によって象徴的に示されるように、教育的通念においては、人間の子どもの極端な受容性という事実から、人間にとっての教育の不可欠性という主張が引き出されてくる。教育的通念にとっては、教育なしには人間は人間になることもできないのであり、それゆえ、教育は自明の前提である。つまり、ことさら〈反省〉の対象にされる必要のないものである。

ところで、この軽率な認識は、教育に関するより専門的な論述の領域においても、驚くほど強力な磁場を形成し、その威力をほしいままにしている。

その強大な磁力線の影響は、教師と教科書を中

心とする、伝統的な上からの教育方式に対してとりわけ激しく及ぶことは言うまでもない。しかし、その磁力が圧倒的な勢力を誇る版図はそこだけにとどまらない。それは、そうした伝統的な教育方式への反省から出発し、より水平的な教育を目ざした新しい教育方式をも席巻しているのである。たとえば、定型的知識のつめこみ・注入を排し、子どもたち自身が問題を解決する過程を経験するなかで、生きた思考と生きた知識を獲得させようとする、いわゆる問題解決学習的な教育方式においても。あるいはまた、国家権力とのより政治的な対決を鮮明化する系統学習的な教育方式、すなわち、利潤と競争の論理を優先する体制、人材開発の観点から労働力の配分を合理的・計画的に行う体制に反対し、子どもの成長発達する権利としての学習権を保証し実現していこうとする教育方式においても。

こうした従来の〈教育〉のパースペクティブにおいては、いつでもその最大の関心事は、自分たちの価値基準に適合した〈子どもの変化〉にある。〈教育〉は自明の前提であり、自分がどうしてそれほどまでに過剰に子どもに働きかけたがるのかという〈反省〉を、従来の教育的通念は一様に欠如している。それらは、自分たちが望ましいと考える〈教育〉の優越性に対しては、激しい自己主張を展開する、つまりどのように注ぐかという〈教育〉の注ぎ方には極だった執着を示す。しかしそれらは、〈教育〉を注ぐこと自体については、つまりなぜ自分はそれほど〈教育〉を注ぎたいのかという自己省察については実に軽はずみな水準にとどまっていて、懐疑の対象からそのことをあらかじめ除外してしまう。〈教育〉という大人の配慮は、未来の存在としての子どもを守る尊いヒューマニズムの地点に立脚し、何よりも子どもはそれなしには人間になることもできない。それゆえそれはあらためて懐疑の対象にされる必要はない、従来の教育的通念はこうした確信に貫かれている。そのために、従来の教育的通念は、人間の子どもの極端な受容性という事実に対して、一つの側面からの意味づけしか提起しえない。すなわち、大人は（〈教育〉する存在は）子どもと異なる存在であり、教えるべきものをもった或る定点に位置している。したがって子どもの極端な受容性という事実は、大人の考えるその望ましい基準点に到達すべき未熟性・非自立性という意味づけのみに矮小化されてしまうのである。

しかし、人間のいかなる意識も定点を構成するということはありえない。なぜなら、第一章で触れたように、人間の意識は次々と累積されて新しい自分を生き、たえず動的状態にある。そしてこうした動的状態こそが人間に固有の本質だからである。したがって、子どもを未来の存在とみなして成長発達する権利主体の位置に据えるという、我々にとっては自明に思えるような意識ですらも、実は関係の網の目に織りなされる歴史的所産にすぎない。大人の位置も動き、子どもの位置も動く。いずれもが絶対静止系ではなく、それゆえ特権的優位に立つことはできない。そして、後段以降に述べることをここで先取りすることになるが、このようにいずれもが動く相対的な存在であるからこそ、そこにこそまた大人と子どもの両方に通底する共通性を見いだす可能性が開かれることになるのである。つまり、こうした理路から子どもの極端な受容性という事実を解読するからこそ、従来の教育的通念とは全く異なる側面、より積極的な意味をもった側面を我々は浮かび上がらせることができる。すなわち、子どもの極端な受容性という事実は、大人の設定する或る基準点に到達すべき単なる未熟性としてではなく、大人にも子どもにも共通する、全く新しい創造性を切り開くという役割をもった積極的なものとして解読されることができるのである。ここにおいて、従来の〈教育〉のパースペクティブが牢固として温存してきた閉鎖系としての特性は、少なくともその決定的な部分においてつき崩される。そしてより開かれた新たなパースペクティブに転換する契機が与えられることになるはずである。

さて、評論家小浜逸郎は、現在、この新たなパースペクティブを切り開こうと試みている果敢な論的存在の一人である。彼は子どもの心理世界と大人のそれを比較する。そしてそこから子どもの極端な受容性に積極的な役割を見いだすことによって、従来の〈教育〉のパースペクティブを根底からくつがえそうとする。さて、小浜の立論の鍵は、大人の心的世界と決定的に異なる子どもの心的世界を彼がどう解明しているかという点に隠されている。彼は、子どものその独特さを、その社会集団で日常生活を営むために必要なコード（価値規

範体系、意味連関）から可能な限り自由であるという点に求めているのである。小浜の言葉に言い換えよう。大人は目的的に行動する「生の時間性」の地平に住むのを原則とするが、子どもはこの世に意味的な回路をもたない「無時間性の岸辺」に立つ可能性を大きくもった存在である。子どものこの独特な心的世界は、確かに、大人の引率が必要であり、次第に日常生活に必要な意味的脈絡を摂取していかなければならない消極性と解される。しかし、このように極端な受容性を特徴とする子どもの世界は、他方で、「世界を貪婪に受容し消化する」ことを可能にするという積極的役割をもつ、こう小浜は主張するのである。[17]つまり、子どもの心的世界は単なる非自立性を特徴とするのではなく、積極的役割を自己からけっして切り離すことのできない両義的構造から成る全体である、これが小浜の見解の核心である。

たとえば大人がどこかへ出かけるとき、大人はその行動の目的・意味を考慮に入れてその行動を起こすのがふつうであろう。つまり、大人は「空間についての既に得られた知識や、かれ自身のかっての行動の感覚を再認する」ことによって「たえずかれ自身の〈過去〉をよびおこ」しながら、未来へ向かう。[18]ところが、子どもは違う。たとえば子どもが親に引率されて自分の知らないどこかに出かけるとき、子どもは自分の行動の目的・意味、いわば未来を付添っている大人にあずける。そして、自らは刻々と異なる空間と交流し、瞬間々々の現在に没入する可能性に専念する、子どもとはそういう存在である。このとき子どもは、「無防備に自分の全身体の行末」[19]を大人にゆだねることによって、自己の意識を徹底的な受容性に近づけている。言い換えれば子どもの意識は、過去の意味関連から自由に切り離されているために、あたかもその代償としてのように現在に対して無限に開放されている。おそらく、過去にとらわれない子どものこの現在との交流は、原理的には、現在に対する極限の摂取量を約束するであろう。こうして、徹底して「自己の身体を世界や関係に対して受容性として投げ出」[20]すという子どもの特性は、積極的な役割を持つことになる。なぜなら、そうすることによって、子どもには、刻々と異なる空間との出会いと交流が可能となり、たえず自分の関係意識を拡張し変成し、たえまなく新しい自分を作り出していくことが可能となるからである。したがってそれは、大人のある基準点へ到達しようとする消極的な運動なのではない。それは、あたかも「節足動物が脱皮行為によって己の皮を見捨てるように」、[21]まぎれもないかつての自己が、内的必然性を確かめながら、新しい自己に止揚されていく積極的な過程であり、絶えまなく現在を止揚していく主体的自己形成の連鎖である。むしろ、原理的には、大人の到達した終着点を始発点とする可能性に開かれた存在、それが子どもなのだということになる。

小浜から傾聴すべき論点はもう一つある。これは本論稿の主題ともとりわけ深く関わり、極めて重要である。上で述べた子どもの積極的な特性、つまり未来を大人にあずけることによって刻々と移り変わる現在を極大値において受容するという特性は、場合によっては、まるで同極に接近された磁針のように激しく頭（かぶり）を振って、子どもを恐怖に陥れてしまうという正反対の相貌を向けてくる。子どもの生活圏域が家庭から社会へと徐々に拡がっていく過程において、子どもは自分の未来を委託すべき場面ではないのに、しばしばそれをしてしまうという過誤をおかす。母親がしっかりと自分の行動の意味・未来を守ってくれているものとばかり思い込んで、次々と継起する場面とたわむれているうちに、いつのまにか全く自分の知らない場所にたった一人で放り出されて恐怖に怯えるという〈子ども体験〉。小浜は、芥川龍之介の作品「トロッコ」を引用しながら、この体験について魅力的な説明を加えている。[22]主人公の「良平」が自分の知らない土地までトロッコを押してきてしまって途方にくれるという場面は、実は、「良平」がつい子ども特有の極端な依存性を発揮してしまい、そこで子どもの心的世界が土工たちの目的的な行動、つまり大人の心的世界と大きくくい違ってしまうことを暗喩しているのである、たとえばこういうふうに。そしてまた、ここから小浜は「大人と子どもの岐路という主題」、[23]子どもの成長を促す内発的な原理という重要な主題を引き出してくる。すなわち、このような危機を体験しながら、子どもは、外からではなく内在的に、徐々に「時間性を胎内に宿すことを知」[24]っていくのであり、この経路を通ってのみ子どもは大人へと成長していくことができるの

である、というように。

さて、従来の〈教育〉のパースペクティブに通底する欠陥の指摘、そして小浜逸郎の斬新で創造的な試みの紹介と、ようやくここまできた。そして、いよいよ、子どもと大人の岐路、子どもの大人への成長、つまり子どもの生活圏域が社会という異質な世界との交流を密にしていく過程という問題を俎上に載せられるところにまで、我々はきている。この問題は重要であり、ここで是非ともことさらゆっくりと歩速をゆるめ、これまでとは別の視角からしっかりと論じ直しておかなければならない。

さて、子どもから大人への通り道、それが平坦であるわけがない。いかなる時代においても、それは何らかの障壁を備えている。しかも、一般に、それは時代を下るにつれてより一層その障壁を厳しく、越えがたいものにしていくように見える。すなわち、文明が進むにつれて、大人の世界は社会・人間関係の網の目をより複雑に、より稠密にして、子どもの大人への無前提の信頼を邪険にはねのけ、子どもの世界との間の断層を深める。したがって、時代が進むにつれて、〈無心〉な子どもが跳び越えなければならない障壁は高くなり、大人社会の目的的な行動のために身につけなければならない用心深さと、その時に思い知らされる砂を噛むような現実の索漠さとはより一層増大していく。とりわけ、商品生産と貨幣経済が浸透する近代社会において、この二つの世界の断層はそれ以前とは比較にならない厳しさをもって子どもの前に現われてくるように思われる。

しかし、時代の進行につれて社会的緊張や子どもへの抑圧が増大するという主張には、当然、異論の提起が予想される。一般的な通念では、近代という時代――西洋におけるそれを典型とするが――は、次のように肯定的な評価を受けるからである。すなわち、近代とは中世的な宗教秩序の重圧や君主の専横といった封建的な後進性から人間を解き放ち、理性の力によって世界を合理的に改変する時代である。近代に至ってはじめて、集団に埋没していた個人が次第に自己を自覚していく契機を明確につかむのであり、近代は一人ひとりの人間がかけがえのない個人として尊重されるようになる大きな画期なのである。つまり、古い伝統的関係の桎梏から人間性が解放される夜明け、むしろ、より一般的には、この見解のほうが近代という時代に対する通常の印象に近いはずである。

しかし、人間の歴史はそのような単純な進歩の図式ではとうていつかみきれない。個人の意識も理性も、そうした近代肯定論者が信ずるほどには、確かなものではない。それらは他のさまざまな諸変数によって織り上げられる関数、たえざる変動を自らの前提とする関係概念であって、もちろん不動の定点などではない。しかも、説明は次稿以下に譲るが、ひとたび個人の意識や理性が普遍的な真・善・義を担う実体として固定されれば、それらはたちまち腐敗し、他者を抑圧する超越的理念へと変貌する、そうしたパラドキシカルな法則から人間は誰一人として逃れることはできないのである。

さて、既に序論で触れたが、従来の近代肯定の考え方にラジカルな異論を提起した一人に、「アナル派」の歴史家フィリップ・アリエスがいる。彼は、著『〈子供〉の誕生』において、近代を一つの転機として家族が大きく変貌することを述べ、そしてその変化の源泉は単なる個人意識には決して求めえないことを、豊富な資料を駆使して緻密に実証している。

彼がとらえた近代の変貌は、以下の諸点に帰着させることができる。

・家族が家族成員間の愛情の場に変化すること。

・嬰児殺し（ないしはその黙認）の風習が衰えて、子どもがかけがえのない貴重な存在に変化すること（拡大家族から少なく産んで大切に育てる核家族への切り換えが始まること）。

・子どもに悪い遊びを禁止し、良い遊びを勧める、その意味での意識の二分法が生まれてくること。

・性を剝き出しのまま素朴に放置する状態から、正しい〈性教育〉によって無垢な子どもを保護しようとする意識に変化していくこと。

・長子相続の慣行が、近代民法の平等概念へと変化していくこと。

・以上の変化においても認められるように、一方で子どもを猥雑な大人社会から隔離・保

護しようとし、他方で社会の誘惑への抵抗力をつけさせるためにより積極的に規律・訓練を与えようとする近代の新しい意識は、家族の領域においては無論のこと、より広い社会や制度の領域にまでも横断的にまたがる広汎な変化をもたらすこと。すなわち、一方で、子どもの保護衛生への配慮と児童福祉・医療制度、他方で、教育への配慮と学校制度といった近代の〈風景〉へと結晶化していくこと。

ところで、とりわけ注目すべきことなのであるが、近代をめぐるこれらいっさいの変化の真相をどう解くかという方法論において、アリエスのそれは従来の〈知〉のパースペクティブをはるかに抜きん出た卓越さを示している。すなわち、彼の立つ地平は、物質的なもの・客観的な実在と無縁な霊魂や精神や意識をいっさいの根源とみなす観念論とも遠く隔たり、また物質的なものをいっさいの根源とみなす唯物論とも決定的に異なっている。つまり、その両方から超え出た新しい地平に到達していると解されるのである。したがって、アリエスの〈知〉は、それらにはない次のような思想的特徴を保有している。すなわちそれは、観念論のように、個々人の意識の覚醒と人類全体の発展をリニアに結びつける誤謬に陥ってはいない。また、唯物論のように、一方で生産力と生産関係の発展と矛盾、あるいはもう少し狭く科学技術の発展と限界とが人間の意識を全的に規定すると主張しながら、他方で、そうした主張を担う自分の意識だけは、いつのまにか、貧者を放置できない人間愛の深さや歴史的意識への覚醒の主体的努力と結びつける、そうした虫のいい特権意識や優越感へ陥る誤謬もおかしてはいないのである。

たとえば、嬰児殺しの例をとろう。アリエスによれば、嬰児殺しはそれ以前から厳しく罰せられる犯罪であったのだが、17世紀末葉までは大目に見られていた。それは、秘密裡に、たとえば事故の形を装ったりして、たぶんしばしば行われていたのである。ところで、18世紀には子どもの死亡率が著しく減少している。この事実を我々はどう解釈すべきであろうか。この死亡率減少という事実の原因は、おそらく、嬰児殺しの風習が下火になったためであるという仮説に求める以外にないのである。なぜなら、そのほかにより妥当な原因が見つけにくいからである。その頃にはまだ、子どものための有効な保健対策も存在していなかったし、それゆえ18世紀の死亡率の減少を医学的あるいは衛生学的な理由にも帰せしめることはできないのである。したがって、18世紀死亡率減少の理由は、両親たちが嬰児殺しを手控えるようになったということ、もっと言えば、両親たちが子どもの死に対してより鋭敏な感受性をもつようになって、子どもの死に堪えられなくなったという新しい意識や感情の出現に帰せしめる以外にないのである。嬰児殺しに対するアリエスの見解の大要は、以上の通りである。[25]

しかし、だからといって、アリエスは意識を究極の源泉とする観念論的立場をとっている、そう理解されるべきではない。すなわち、意識が、客観的実在と無縁なところで、人間愛や歴史的真理に目ざめ、あるいは個人意識や権利意識に目ざめ、その結果、封建的拘束を乗り超えようとする新しい意識に自力で到達したなどというぬぼれに、アリエスが同調するわけはないのである。このことは、彼の苦く逆説に充ちた次のような発言からも明らかである。

「過去何世紀かの変革は、しばしば家族意識も含めて、社会的拘束に対する個人主義の勝利として言われてきた。夫婦のエネルギー全体が、自発的に数少なくしか作らない子どもの出世に向けられるこの近代的生活にあって、いったいどこに個人主義が見えるだろうか。個人主義はむしろ、アンシャン・レジーム期の家族の、多産な家系の快活な無関心の側にあるといえはしないだろうか。」[26]

近代にさしかかって、なぜ人々は子どもに特有の関心を示すようになり、「子供たちと母親―子供関係へのほとんど強迫観念といいうるほど」[27]の愛情を示すようになったのか。なぜ「子供を大人ばかりか少年からも区別する」[28]という、あの子どもを特殊とみなす意識、すなわち「子供期という観念」[29]が存在するようになったのか。結論を急ごう。それに対するアリエスの答えは、社会の深部の変動によって引き起こされる「精神的独居」、[30]つまり孤独に人々が、とりわけその変動を推進する社会的人格であるブルジョワジーが耐えがたくなるからである、というものである。「18世紀以降、……土台を揺がす変動によって、主人と

奉公人、大人と子供、友人もしくは客人の間の旧来の関係が引き裂かれ」る。[31]

ところで、近代にさしかかって人々を襲うこの孤独について、たとえばフーコーはとりわけ鋭く徹底した分析を展開している。その一端に触れてみよう。彼によれば、君主制は確かに、極端な場合、犯罪の容疑者に対して身の毛のよだつような拷問を使用したり自白を強要したかもしれない。また身震いするほどの残虐な身体刑を、つまり火あぶりや四つ裂きや内臓陳列や絞首刑などを適用したかもしれない。[32]しかし、それにもかかわらず、これ以降の社会に比べれば、人々ははるかにゆるやかでのどかな社会条件の中で暮らしていたのである。この旧体制下では、実は、法規範の拘束性はそれほど厳しいものではなく、王令でさえも適用されないで眠ったままの休法ないしはザル法が珍しくなかったのである。つまり、「違法行為に対する黙認の余地」がまだまだ残っていたのであり、それに対応して各社会層にはそれぞれ法をすり抜ける「特権」が与えられたりしているのである。この黙認された特権には例外がなく、最下層の社会層にいる人々にも与えられていた。彼らでさえも「法と慣行が課す彼らの義務の周辺部で、力による不屈さによるかして獲得していた、黙認の余地を活用していた」。たとえば「封建領主の法外な賦課」への抵抗や、「密輸入や徴税官との武闘」や、放浪すなわち『失業者、流浪する職人、逃げ出した召使、虐待された徒弟、脱走兵、すべての徴兵忌避者』の避けられない逃亡も、法から逃れうるための黙認の余地を残すのに大きな力を発揮していたのである。[33]

そして、この時期、下層民はこうした違法者に対してまだ親近感や共感をもっていたし、現実にかくまったりすることもあった。それどころか、自分たち自身も犯罪をおかしかねないことも知っていた。違法行為をおかす人たちは、下層民の内面に「讃辞と侮辱」、「援助と恐怖」の分裂を引きおこす両義的存在だったのである。すなわち、一方で、犯罪者の密輸入や圧制を働く領主への襲撃などは、苦しんでいる下層民の直接・間接の利益をもたらしてくれるために、下層民の喝采を呼ぶものであった。しかし他方において、「物乞いする放浪者が盗んだり殺人を行う」と、災いが具体的に自分に及んでくることになるから、「簡単にそれは特定の憎悪の対象になった」のである。[34]そしてまた、こうした違法行為を黙認するゆるやかな社会環境は、新興のブルジョアジーの階級利益とも、当初は幸運な一致を果たすものであった。すなわち、彼らは『経済上、税関上の諸法令の不履行、黙認、同業者組合の実務の崩壊を基礎に台頭し、その繁栄を樹立していったのである』。[35]以上の事柄をここで簡単に概括しておくとすれば、この時期の社会は、相対的にではあるが、まだ階層間の牧歌的な調和を赦す段階にあった、こう言えるであろう。

しかし、18世紀後半、富の一般的な増加と人口の急増、民衆の生活向上と階層分化の進行は、人々の身の周りに世知辛い防壁を張りめぐらせてしまう。国民の急激な分裂、哀しい乖離の始まり。——守るべき富を持つ民衆が増大してしまったのである。生活が向上し、富を所有した民衆にとって、もはや放浪は単に「泥棒と殺人者を生む温床」[36]にすぎない。このように守りにまわってしまった意識にとっては、自分たちの枠からはずれているということ自体が既に目障りなこととなる。保身に曇った意識には、逸脱者は「社会のなかでその成員とはならずに生活し」、「すべての市民にたいして正真正銘の戦争をしかけて」[37]いる犯罪予備軍に見えてくる。この新しい意識が身の程を忘れた正義を標榜する法的制裁へと自らを駆り立てる。すなわち「こうした彼らには極刑をもって臨む」べきであるし、「彼らを森から追い出すために、人々がこぞって狩り立てを行う計画を立て、捕えた者は各自、報酬を受け取るべき」である[38]と。そしてまた、ブルジョアジーに属する新興地主にとっては、それまで黙認されていた下層民の特権も、自分たちの利潤を脅かす意義しかもたなくなる。それゆえ、それらも法的規制の対象とされなければならなくなる。たとえば、「農民層のすべての黙認事項（古い強制的義務の不履行、変則的な慣行の固定化、たとえば共同放牧権、枯木ひろいなど）」は「単なる犯罪（法律違反）として追いまわす」べき対象となるのである。[39]

再度、反復しよう。これ以降、人々の牧歌的でゆるやかであった生活は、より厳格な規律と秩序、監視と処罰とによって、根底から揺らぎ始める。それ以後、人々は、自分の内面においても、お互いの間においても、相互の監視と警戒をいささか

も怠ることのできない永遠の仇敵同士として闘い続けなければならなくなるのである。さらに付け加えるとすれば、〈現実〉の世界において赦されなくなった犯罪や犯罪者へのこの共感は、おそらく文学・芸術その他いっさいの〈表現〉の世界で満足させる以外の方途を失っていくことになるはずである。

再度、アリエスに戻ろう。既に、結論を急ぎ、近代における人々の意識の変化がどこに由来するか、という問題に対するアリエスの究極の解答は明らかにしておいた。近代における人々の家庭への退行、子どもに対する過度の関心、それは社会の深部の変動によって引き起こされる「精神的独居」から生じる、それがアリエスの解答であった。その指摘のあと、既に、フーコーに依拠しながら、近代において人々を襲った孤独についての検討も試みた。その結論だけをここで簡単に挙げるとすれば、近代における守るべき富の増大が人々の相互監視の状況を生み出すこと、相互の監視と牽制は人々の苦悩と孤独をもたらすこと、こういうことになろう。

アリエスの発言に、できるだけ注意深く耳を傾けよう。彼は言う、人々は近代におけるこの孤独、この「社会的圧力が耐えがたいために社会から切り離されよう」と望み、この息苦しい「社会から身を守」るために「近代的家族」にひきこもる。同じことだが、近代における孤独が耐えがたいために、「他人から隔絶されよう」と欲し、「近所づきあい、あるいは友人関係、あるいは伝統的な対人関係を犠牲にして、私的生活のプライヴァシーを増強していく」。(40)通説に抗して、近代がむしろ人間の苦悩を増大させてしまうらしいこと、その苦悩が客観的な諸関係の問題からやってくるらしいこと、これらについては、一応ここではフーコーの論の検討から明らかになったことにしておこう。しかし、なぜ近代の人々は子どもに過度の愛情を向け、家庭に引きこもるのか。社会における人々の敵対と孤立が問題であるのにもかかわらず、逆に家族単位でますます孤立してしまうことがどうしてその解決となるのか、このことについてはまだ我々において解明されていない。

しかし、この問題の解明はそうやさしくはない。そこで、ここでは、小浜逸郎の「行き暮れる実存」の考え方を応用することによって、その問題に対する解答の一つを提示しておくにとどめるということにする。さて、フーコーの検討によってわかったことは、守るべき富の増大によって相互監視の状況が生まれ、そして人々の苦悩と孤独が始まるということであった。ところでこの内容は、小浜の論証形式に変換可能である。早速、それに変換することにしよう。すなわち、近代における深部からの社会変動と人間相互の乖離は、いたるところで大人のもつ過去・意味連関を役に立たなくさせる（現在に没入する生の充足を遮断する余計な意識を生み出してしまうということも含めて）ということ、そしてそのため、大人は未知の世界に一人で無力なまま放り出されたような感覚を味わう（孤立と敵対）ということ、これらがそのフーコーから小浜の言い方への換算値である。そして、ここまでの段階においては、フーコーの検討で得られたことと小浜の主張とはいわばトポロジー的に同型の関係にある。しかし、問題は次の段階である。人々はなぜ子どもに過度の愛情を向け、家庭に引きこもるという挙に出るのか。

このことについて、小浜の理論を応用しながら考えてみる。すると次のようなことが言える。すなわち、近代の孤立、アリエスの言葉で言えば「精神的独居」の体験に遭遇している時の大人は、社会のテンポに立ち遅れて行き暮れる焦慮を嚙みしめているのかもしれないし、生存の不安に脅えているのかもしなれい。しかし、それはどちらでも構わないのであって、ともかく、この時の大人は、本質的には、親を見失って孤独に脅える子どもと異なるところは少しもないのである。そして、この同一性が重要なのである。たとえ両者に異なるところがあるとしても、「トロッコ」において泣きじゃくる良平と異なり、大人にはしがみつくための優しくなだめてくれる母親がいないという点があるにすぎない。すると、大人はその代理を他に求める以外に方法をもたない。では大人は孤独を癒すために母親の代理をどこに求めようとするか。それは、近代の孤独によって苦痛に歪んだ自画像を自らの分身である子どもにさかさまに写像することによって得られる、〈かけがえのない〉家族と子どもにである。すなわち大人は、社会で排反した度合だけ、家族の凝集度を強めることによってそれを切り抜けようとするのである。〈内部〉と〈外部〉をつくりだすこと。つまり〈内部〉

への愛着と尊重と凝集と公平、そして〈外部〉への嫌悪と侮蔑と排斥と差別。これもまた最も人間的な、固有の行動。

もちろん、あらかじめ結末を先取りして語るような具合になるが、これは人々の孤独を本質的に解決する方法とはなりえない。この方法は社会における人々相互の敵対と孤立を避けようとして、かえって家族単位でますます孤立するということを結果するだけだからである。まるで雨を避けるために濠流に身を投じるように。そしてまた、この方法はサルトル（J. P. Sartre）の言う「魔術的実存」の歴史版とも言えそうである。なぜなら、合理的手段で解きえない現実に直面したために、家族愛という〈意識〉に閉じこもって問題そのものを観念的に消去しようとしているからである。(41)

しかし、ともかく、近代の人々はこの困難な矛盾をかかえこむパラドキシカルな方法を生きるのである。こうして、近代において、子どもは「取るに足らぬ存在」(42)から、「かけがえのないもの」(43)に変貌する。「子供を亡くしてもそう悲嘆に暮れることもなく別の子供によって埋め合わせ」(44)ればよいと思っていた旧い意識の地層がその終端をあらわし、一人ひとりの子どもがかけがえのない大切なものであり、「よりよく面倒をみるために子供の数を限定するのがよい」(45)と考える新しい意識の発端が地上に顔を突き出す。そして、一人ひとりの子供の成長と発達、健康と教育が大人にとって他に比類なき関心事となっていく。もっと問題を広げてよいとすれば、ここにおいて生み出されるこの新しい意識こそ、家族と福祉と教育と学校、要するに近代において最も重要だとみなされている制度・観念のいっさいを構成する基礎、いわばいっさいの形式をうみだす質料、あるいは近代の〈風景〉のいっさいをうみだす源泉、そうした役割を果たしていくものなのである。

ところで、以上の叙述から明らかなように、アリエスは、近代におけるかけがえのない〈子どもの発見〉の理由を、人間愛の目ざめにも歴史意識の覚醒にも帰着させていない。なぜなら彼のパースペクティブにおいては、人間の意識はつくるものであると同時につくられるものであり、あるいは起点であると同時に到着点であるからである。つまり一方への一元的還元を拒む錯合した構造をなしているからである。この意味で、既に触れたように、彼が立脚する地平は客観的実在を無視した独我論的立場にもないし、また自分に都合の良い時だけ人間愛や歴史意識がとび出してくる唯物論でもない。そして、何よりも注意されるべきことは、この創造的な地平からくり出される彼の言説によって、「倫理」への素朴な信仰に依拠する従来の社会変革理念において、ひそかに隠匿されていた自己欺瞞の一角が確実につき崩されてしまうということである。彼によって、我々は、一人ひとりの意識の目覚めを無媒介に社会の変革に結びつけるような、オプティミスティックな理論地平にしがみつく特権をもはや剝奪されてしまっているのである。

第三章　近代日本における〈子ども〉の誕生

日本の近代においても、〈中世的家族〉から〈近代的家族〉への移行という西欧と同様の現象が起こっている。それは、第二章で述べた芥川と谷崎の作品からも十分に窺われる。明治という時代を大きな画期として、民族の存続そのものすらを脅かす列強の外圧も加わり、我が国民は資本主義の推進という国家的施策にあわただしく追い立てられていく。社会の土台を深部から揺がすこの変動は、日本人の意識をもまた根底から組み変えていく。組み変えざるを得ないような耐えがたい「精神的独居」、つまり孤独が、アリエスの先の指摘通り、日本人の意識を襲うからである。

こうして、ひたすら強度を増しつづける相互監視と規律と競争のために、まるで危機に脅えた動物が巣穴に戻るように、日本人は次第に〈近代的家族〉に引きこもる。他者への純朴な信頼も、無邪気な自信も、健康な自己顕示も、要するに、バタイユ（G. Bataille）の言う、現在に没入する〈生の充足〉のことごとくが近代の勘定高い現実につき返される。まるで道に迷って途方に暮れる子どものように、大人は「行き暮れ」て〈母〉（家庭）に慰撫されることを欲し、社会に対して身構えることを〈学ん〉でいく。以後、他者への剝き出しの善意や過剰な信頼は〈子どもっぽさ〉の代名詞となり、子どもの専有物となる。まるで、意識の中で「囲い込み」が起こったように、共有地であったものが子どもの私有地に変わる。そしてまた、近代を境に、〈遊び〉が大人にとって仕事と仕事の

合い間に内密に行うものに変化し、それに対応して子どもが〈遊び〉の専門家としての社会的役割を振りあてられていく。こうして、子どもの美徳が、見識や賢明さや老獪さや処世術や社交辞令や両天秤や駆け引きや面従腹背などといった大人の美徳と二項的に対置される酷薄な歴史が始まることになる。

一方で社会に対して身構え、他方で家族の愛に包まれようとすること、それは、言い換えればまだしも束縛のゆるやかであった以前の社会が計算と利害と競争の殺伐とした合理的社会へ変貌するちょうどその度合いだけ、家族と子どもに情緒的な要素を加算することであるということになる。これは、言うまでもなく、人間だけがおこなう固有の行動である。デュルケム(E.Durkheim)が言う通り、他の動物は経験によって知覚する「ただ一つの世界しか知らない」。ただ人間だけが「現実に何ものかを付け加える能力をもっている」。[46]では、近代にさしかかって、なぜ人間は現実に何ものかを付け加えるのか。この問題の解答は、マルクスの永遠に讃えられるべき独創的な明察によって、既に正確に言い当てられている。すなわち、人間と人間が分離し、対立する非人間的な関係にある[47]から、人間はそうするのである。いわゆる「万人の万人に対する戦い」の状態のなかにある[48]から人間は〈何ものか〉を現実に塗布しようとするのである。人間は、互いにフーコーの言う「監視」と「処罰」の応酬の泥沼にはまりながら、アリエスの言う「精神的独居」、つまり孤独の淵に沈んでいく。人間は、この時、孤独を癒してくれる「幻想を必要とするような状態」にあるのであり、いわば〈宗教的〉に救済されたい状態にあるのである。[49]天上の世界でもいい、ユートピアでもいい、要するに人間は「現実に何ものかを付け加え」ずにはいられなくなる。「取るに足らぬ存在」であった子どもが「かけがえのないもの」に変貌し、世間とのつきあいの密度が高かった状態から、家族が「孤立した親子からなる集団として社会に対立」[50]していくのも、無論同一の理由からである。この時、家屋の構造も塀や入口や間取りなどに決定的な変化を、つまり〈世間に対する防衛〉・〈孤独を癒す救済〉というメタ・コードを受け取るだろう。そしてまた家族に対する意識も同じメタ・コードに基づいた決定的な変化をこうむる。たとえば、子どもの魂も大人と同じく取り替えがきかず、不滅のものであることをまるで初めて発見したように、子どもの死に対して人間は悲嘆にくれるようになる。そしてまた、児童虐待に対して、それがたとえ他の家庭の問題であったとしても、批難の眼を向けるようになったりするのである。要するに、家庭は、〈何ものか〉を付け加えられ、物質的次元においても精神的次元においても変貌することになる。既に触れたが、〈内部〉と〈外部〉の創出。〈内部〉への偏愛と〈外部〉への冷視が対極的に並列する二極構造。

さて、ここまできて、ようやく第一章で述べた前田愛の見解、とりわけ芥川と谷崎の作品分析に戻ることができる。二つの作品に対し、ここで第二章以降で述べてきた我々の理論的前提に基づいて、若干の考察を付け加えておきたい。

まず、芥川の作品についてである。できるだけ高い上空からこの「杜子春」という作品の基本的な構図をとらえ、作者の根本のメッセージをつかんでみる。すると、理解されることは、この作品が、まさにこれまで我々が述べてきた解釈における〈近代〉の暗喩として読めるということである。近代においてはじめてかけがえのない家族と子どもが発見されるわけであるが、この現象を生み出す歴史の歩みは、これまでの叙述から明らかなように、次のような三段階の流れ図に単純化できる。すなわち、それは社会の変動――孤独――家族の再発見という図式に集約可能である。打算と競争、監視と制裁という外の変化が、孤立し「行き暮れる」内なる変化をもたらし、それを癒す「ユートピア」としての家族、「おとなの心のふるさと」としての家族が結晶化される。外の変化が内の変化をもたらし、そして両者が統合される。あるいはまたこうも言える。外の危機が人々の意識に死への不安をひき起こし、それを人間固有の方法で克服して人々はまた再生する、そしてまた次の段階に引き継がれていく。さらに、怖れずに一般化を試みるとすれば、人間の〈内部〉と〈外部〉の二つの領域が相互に浸透しあうこの一種の弁証法的展開は、人間の生の本質のいっさいが含み込まれた、いわば生の、あるいは歴史の最小単位と言えるものである。

そして、杜子春もまた近代の孤独に「行き暮れ」ている。「ぼんやりと空を仰いで」、[51]心は「身を投

げて、死んでしまった方がましかも知れない」[52]という極限の想念に取り憑かれている。そこまで彼を追い込んだ外の要因は、富や財産の気まぐれな動きであり、金銭によって態度を豹変する人間の薄情さである。つまり、一言で単純化してしまえば、近代に至っていよいよその全貌をあらわしてくる交換貨幣経済体制、そうしたものによって大枠がかたどられる、そんな矛盾である。したがって、この作品は、三段階によって構成される近代の流れ図の三要素のうち、第一の外的要素と第二の内的要素を満たしていることになる。そしてまた、次のように第三の要素も充たしているのである。なぜなら、杜子春の母は自分の身を犠牲にしてまでも〈かけがえのない子ども〉の幸福を願い、献身的な〈愛情〉をそそぐ近代の母親であるから。そしてまた金銭に頓着せず純粋で母親思いの杜子春は、近代においてはじめて発見される〈純粋無垢〉な子どもであるのだから。

家族愛に包まれることによって孤独を癒そうとするという、この近代の新しい意識の枠組みの中で、人々はさまざまな認識を派生させていく。その認識のしかたの典型を、芥川はこの「杜子春」という作品において描いていることになる。すなわち、この酷薄な近代社会において立身出世を目ざしても、そしてたまたまそれを獲得しても、それは人を幸福にすることはできない。この社会で上昇を目ざす場合にくり広げられる生存競争には、母親をも踏み台にしなければならないほどの奈落の陥穽が設けられている。無事に富と地位にたどりつくころまでには、人々は自分の真心と愛情を、要するに大切な人間性を悪魔に売り渡してしまっているだろう。だから、本当に人間を幸福にしてくれる道はほかの場所に求められなければならない。それは、きっと、もっとずっとささやかな生活、もっとずっと「人間らしい暮らし」[53]においてこそ発見されるであろう。それを、人間は献身的な母親と無垢な子どもを中心として営まれる〈近代的家族〉によって実現すべきなのである。

このように、まさしく、芥川のこの作品には、近代において人々がみずから追い求めると同時に追い込まれもする〈近代の家族〉が、到達すべき理想として描かれている。つまり、前田愛の子ども像の三類型で言えば、それは「おとなのユートピア像」としての第二類型に含められるものを暗喩しているのである。

芥川によって『杜子春』で描かれたものが、〈かけがえのない家族と子ども〉を発見する近代の新しい意識の表側、いわば正の自画像であるとすれば、谷崎が『小さな王国』で描いたものは、その裏面、いわば負の自画像(前田愛の分類で言えば、第三類型〉である。つまり、前田が正確に指摘した通り、この両作品は「ちょうど対になる」[54]関係をもっている。近代の新しい意識は、その表側では、純粋無垢で保護されるべき子どもとそれを献身的に守る親とによって構成された人間愛にあふれる家族が前提におかれる。しかし、もともと、この近代の方法はパラドキシカルな方法であった。この方法の表側をずっとたどっていくと、それは子どものためではなく、悲惨な現実から自分を幻想的に守るために考え出した大人の便宜という裏面に、メビウスの環のように連結してしまう。そのため、この近代の新しい意識は、もともと大人の利益を図っているという功利性から切り離すことのできないものなのである。にもかかわらずこの意識は、自らを人間愛や権利意識から発したものであるとか、子どものために自分のいっさいを投げ出す、純粋な無私の愛に由来しているとかと思い込みたがっている。この自己欺瞞は、もちろん、いつ暴露されてもしかたのない運命（さだめ）にあると言えよう。

どのようなときに、この自己欺瞞が露呈されるものであろうか。たとえば、谷崎の『小さな王国』という作品がその一例を示している。沼倉という妙に老成して世智に長けた〈子ども〉は、自らの意のおもむくままに自らの欲求を実現して、大人が勝手に描く、子どもとしてのあるべき虚像を打ち破っていく。大人の思い入れなどに委細構わず進行していく教室の現実に対し、近代におけるあるべき理念の枠組みからけっして逃れられない先生によってなされる抗弁は、痛々しいほど空疎な音響に震えている。しかし、いささか論の枝道にはずれることになるが、「恐い先生」から「面白いお友達」への転換、つまり、いわゆる教師中心主義から児童中心主義への時代的転回を見事に象徴するこんな場面を、こんな小品の、こんなさりげない箇所に、こんなに我々の実感にぴったりさせて、そっと忍び込ませる大谷崎の鮮かな筆力には

あらためて驚嘆する以外にない。

「われわれの生徒に対する威信と慈愛とが沼倉に及ばない所以のものは、つまりわれわれが子どものような無邪気な心になれないからなのだ。全く子どもと同化して一緒になって遊んでやろうという誠意がないからなのだ。だからわれわれは、今後大いに沼倉を学ばなければならない。生徒から『恐い先生』として畏敬されるよりも、『面白いお友達』として気に入られるように努めなければならない。」(55)

子どもが「無邪気」だという先生の思い入れは、まるで嘲られるように沼倉の行動とすれ違っている。しかし、何かといえば自分の得になる方へめざとく立場を変える狡猾さや、自分の権勢やなわ張りを拡張するために力や知恵を働かせる残酷さは、近代の新しい子ども観とまっこうから矛盾する。それどころか、もともとそれらは近代の新しい意識がせっかく押しのけた負の自画像（大人を孤独に追い込む近代の現実）にほかならないものである。したがってそれらは、〈かけがえのない家族と子ども〉を前提とする近代の表側の理念にとっては、盲点に位置していることになる。つまり、それらはけっして知覚することのできない〈実像〉である。しかし、タテマエの理念などが、仮借なく進行する現実に抗うことはできるはずもない。案の定、先生が囚われている〈子どもは無邪気だ〉というタテマエの理念は、先生の貧困という現実によってひとたまりもなく打ち破られる。すなわち、「口もとではニヤニヤと笑っていながら、眼は気味悪く血走っ」(56)た顔で沼倉にミルクを懇願するという、思わず目をそむけたくなるような先生の屈辱的な悲劇のなかで、そうした理念の解体が苦もなく進行してしまうのである。

しかし、もちろんそこで、谷崎は、物質的な兵糧攻めの前には誇りも何もかも打ち棄ててあえなくひれ伏してしまう、そうした人間の弱さと醜悪さをことさらにあげつらうためだけでその場面を挿入したわけではあるまい。おそらく、そのように自らが自らを呑み込むようなウロボロス的な悲痛を通してしか、人間は自らの生み出した理念を自らによって打ち破ることはできない、このことをも含意させて谷崎はその残酷な場面を描いたはずである。そして、先に小浜逸郎をとりあげた箇所で説明したように、耐えがたい恐怖や屈辱を伴うこうした危機的な体験、人生のいっさいが含み込まれた生の最小単位、いわば生の〈モナド〉、ここを通ってのみ、〈子ども〉は内在的に〈大人〉に成長していく、つまり真の〈学習〉を体験することができるのである。しかも近代の社会が利潤と能率と競争を戒律とし、こうした真摯な恐怖や屈辱を押し隠すことを強いてくる以上、谷崎のこの作品はこうした近代の人々の自己欺瞞をあばくことに向けられている、むしろこう解読されるべきであろう。そして、もしもこの考察が正しいとすれば、「口もとではニヤニヤと笑っていながら、眼は気味悪く血走っ」た顔で沼倉にミルクを懇願するという先生の屈辱は、現実に対するただ単なるみじめな敗北ではないということになる。オプティミスティックな希望を語りすぎるという批判を怖れずに、あえて言えば、谷崎の描いた先生のこの屈辱は、新しい〈知〉のパースペクティブを生み出す創造の第一歩を意味している、そういうことになるはずである。　（1989年11月28日受理）

註

(1)　柄谷行人『日本近代文学の起源』　講談社　1984年（初版1980年）　161―162頁
(2)　斉藤浩志「教育とは何か」（青木一他編『現代教育学事典』　労働旬報社　1988年　182―184頁）
(3)　フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生――アンシャン・レジーム期の子供と家族生活――』　杉山光信・杉山恵美子共訳　みすず書房　1983年（初版1980年）
(4)　同書　346頁
(5)　同書　8頁
(6)　森田信子『子どもの時代――「エミール」のパラドックス――』　新曜社　1986年
(7)　同書　307頁
(8)　同書　313頁
(9)　同書　307頁
(10)　前田愛「文学のなかの子どもたち」（栗原他著『学校化社会のストレンジャー＝子どもの王国』　新曜社　1988年）
(11)　同書　183頁
(12)　同書　184頁
(13)　同書　185―186頁
(14)　同書　188―191頁　芥川龍之介「杜子春」1920年発表　（『芥川龍之介集　現代日本文学全集26』　筑

摩書房　1953年　149―154頁）
(15)　前田前掲書　192―194頁　谷崎潤一郎「小さな王国」　1918年発表（『谷崎潤一郎集　現代日本文学全集18』　筑摩書房　1954年　392―405頁）
(16)　ワロン『身体・自我・社会』　浜田寿美男訳編　ミネルヴァ書房　1986年（初版1983年）　76―80頁
(17)　小浜逸郎『学校の現象学のために』　大和書房　1986年（初版1985年）　210頁
(18)　同書　200頁
(19)　同書　206頁
(20)(21)　同書　203頁
(22)　同書　204―207頁
(23)(24)　同書　207頁
(25)アリエス前掲書　8―9頁
(26)　同書　381頁
(27)　同書　15頁
(28)(29)　同書　122頁
(30)　同書　381頁
(31)　同書　382頁
(32)　ミシェル・フーコー『監獄の誕生――監視と処罰――』　田村俶訳　新潮社　1983年（初版1977年）とくに第一部第二章「身体刑の華々しさ」（37―74頁）
(33)　同書　85―86頁
(34)　同書　86頁
(35)　同書　87頁
(36)(37)(38)　同書　90頁
(39)　同書　88頁
(40)　アリエス前掲書　381―382頁
(41)　拙論「現象学からみた『子どもの自殺』　（1）――『子どもと自由』に関する一考察――」　山梨県立女子短期大学紀要第22号　1989年　35―36頁
(42)　アリエス前掲書　40頁
(43)　同書　377頁
(44)(45)　同書　3頁
(46)　デュルケム『宗教生活の原初形態』　古野清人訳　下巻　岩波書店　1975年（初版1942年）　332頁
(47)　マルクス「ユダヤ人問題によせて」（『マルクス／経済学・哲学論集　世界の大思想II―4』　花田圭介訳　河出書房　1967年　18頁
(48)　同書　15頁
(49)　マルクス「ヘーゲル法哲学批判序説」（前掲書　35頁）
(50)　アリエス前掲書　379頁
(51)(52)　芥川前掲書　149頁
(53)　同書　154頁
(54)　前田前掲書　194頁
(55)　谷崎前掲書　398―399頁
(56)　同書　405頁